

東京大空襲体験記

●和泉三丁目

深沢 収

(明治三十五年生まれ)

私は昭和二〇年三月一〇日の東京大空襲の猛火の中を生残ったのでございます。荻窪在住の私は当時常習のようになつておりました米軍B 29の早朝空襲を懼れ、九日夕食後よんどころない所用を携えて江戸川区平井の妹夫婦の家を訪ねました。先方に着いたのが午後九時前、まだ挨拶の済まぬうち不気味に鳴りひびくサイレンの音、これこそ一夜にして東京を——焦土と化し、一〇万余の死者と無数の負傷者を出したあの大空襲の始まりでした。自家を守る妹夫婦を残し、私は時を移さず乳母に背負われた幼い姪を庇いながら避難先への道を急ぎました……。ごうごうと爆音を響かせて飛びゆく敵機、降りそぐ焼夷弾の物凄い唸りと炸裂する地ひびき、アチコチから燃え広がる火の手に逃げまどう阿鼻叫喚の人波にもまねながら、ようやく辿りついた家は既に疎開して空家になっておりました。絶えまなく続く空襲に死を覚悟した私は、中川の水ぎわで燃えさかる紅蓮の焰をみつめながら夜の明けるのを待ち侘びました。やがて東が白むとともに敵機も去り、ようやく我に返ったころ、硝煙の臭いを全身にまとい

幽霊のような姿で辿りついた妹夫婦と再会、無言のうちにく抱合つたあの感激と喜びは今なお忘れ得ぬものとなりました。家を焼かれ、よもすがら猛火の中を逃げまわつた妹夫婦。私はもう何も言う言葉はありませんでした。生きているという厳粛な事実を前にして……。しかしこの興奮のなかで私の心は既に家族の待つ我が家に飛んでおりました。真赤な東の空を眺めながら、心痛の一夜を明かしたのであろう家族を思うと、帰心矢の如く、義弟の自転車の荷台に腰かけて両国駅まで送られました。途中の惨状は筆舌に尽しがたく、行き過ぎる町々は鬼気迫り、到底正視に耐えられないものでした。まだ燃えている家もあり、道をふさぐ数知れぬ焼死体、あるいは全身の大火傷にもがき苦しむ人など、地獄図絵を見るような恐しい光景でした。義弟は焼死体の多い所では自転車を抱えてまたぎ、私も手を合せながらまたがせて頂きました。こうしてようやく両国駅に辿りつき我に返ったとき、突然に生かされている感動と実感がが泉のように湧きでて、こぼれ落ちる涙をとどめようもありませんでした。やがて混み合う電

車に押込まれ——無事に我が家に戻りついた時、最初の夫のことは「おお生きていたか」このひと言でした。その後全国的主要都市もほとんど空襲に遭い、広島に続く長崎への原爆投下により、一挙に終戦となりましたが、その後復興途上の物心両面での困難さは申し上げるに忍びません。しかし、この戦争の歴史と原爆の悲惨な経過は、いつの世までも語り継がねばならぬ大切な事だと思います。今こうして眼をつむりますと、半世紀近く経た今日、いまなお原爆症に苦しむ人々、モンペと防空頭巾、隣組制度、空襲警報発令の声、野草や木の実を食べて餓を凌いだ事など、複雑な思い出となつて脳裡を駆けめぐります……。それからのちも今日まで地球上のあちこちで絶えまない戦いが繰り返されております。願わくは世界中のいのちあるもの総てが平和で暮せますようにと祈る明け暮れでございます。私も今は平穏な暮しのなかでやがて卒寿を迎えようとしております。

空を焦す紅蓮の焰に追われつつ川の辺にのがれ修羅のおもひで

昭和57年4月11日詠

夕蟬をさけば思ほゆ終戦の夜の灯りのまぶしかりしこと

昭和62年9月13日詠



防空地下室での患者さん看護と 妊婦さん介助

●梅里二丁目

福田 移歩

(大正二十一年生まれ)

昭和一六年に看護婦、助産婦、保健婦の養成所である日本赤十字社産院本部（現、日赤医療センター）に入学し、戦雲たれこめた昭和一八年三月にその養成所を卒業して、看護婦など三つの免状を得ていました。戦争たけなわの時、勤務先などの病院におきまして、疎開出来ない当時七〇歳の女の患者さんが手術を受けられ、お体の調子が少しづつ良くなられて病室におられます時に、三月の東京大空襲があり、私は自分の背丈よりも大きなその患者さんを背負って防空地下室へ向かいました。数メートル歩くのがやつとで、ハア／＼と息苦しくあえぎながら、この空襲警報が早く解除になるようにと心に祈り、とにかく安全な場所へとお寝かせて責任を果たしたとたんに、自分が倒れてしまいました。安心したのと、患者さんを背負っております時に付けられていたゴム管がなにかのはずみではずれて、私の体に患者さんの尿がかかり、私はビショ／＼になってしまいました。それに、寒くなり冷や汗も出て、なにもかも同時に起こり、自分の精神力の倍以上の力がとっさの場合出るもので、体が驚いてしまい、すべ

ての力を出しきった後がっくりして脳貧血を起こしてしまつたらしい。大きな声で名前を呼ばれ、ハツと気がつき、私は生きていてよかつたと喜び、よしこれからも患者さんのために頑張らなくては、と心にちかい、勇気を出して働きました。

昔の担架は今のようになく、とても重く人手も数人必要です、患者さんを背負うのが一対一で人手不足の場合に役立ったのです。小廻りも出来ますし、あのころは空襲警報ばかりで、赤十字のマークが屋上にあつても色が薄いためによく判明せず、焼夷弾や照明弾がよくあたりに落とされました。少しでも早く患者さんを安全な場所に移し、無事にお寝かせできたので胸をなでおろしました。後で当時のK院長先生、婦長に自分の体より大きい患者さんを一人でよく地下室まで運んだことをほめられました。その時はなんとかしなければと無我夢中でしたし、私がお世話した患者さんからも感謝の言葉を頂戴いたしました。私はその時、この道を選んでよかつたとつくづく思いました。

これも体験したことなのですが、やはり昭和一九年四月、疎開の出来ない妊婦さんが、日赤産院で空襲のひどくなった時に安全な防空地下室で無事に分娩なさり、立派な赤ちゃんをお生みになった方もおられます。また、空襲警報の最中に産気づかれた方もあり、お気持を落着かせするのに苦労しました。妊婦さんを介助している時に照明弾、続いて砲弾が近所に落ちた時は生きた心地がなく、もう駄目かと思いました。後で見に行きましたら、大きな穴が道に数か所開いており、その砲弾の衝撃音が部屋におりましても空気を突き破り、シューシューといやな音を立てて飛び交い、部屋の中においても外にいる感じで、今にも頭の上に落下して来るようで、思わず首を引っこめる仕種をしてしまいます。あの不気味な音は、四七年も経過するのにB29の爆音とともに今でも耳の奥にするどく深く残り、昨日のように想い出され、忘れる事か出来ないのです。上手に記録する才能もなく、ただありのままを認めました。戦争って恐ろしいと思います。二度と経験したくありません。



東京空襲をうけて

●久我山五丁目

松原 栄作

(大正六年生まれ)

昭和一五年三月、私は大学を卒業して第一生命に勤めた。自宅は京橋区(現中央区)八丁堀にあり、貸家業を営む父と、母、第二人、妹二人の七人家族であった。

会社に入って、支払課という保険金支払事務を担当する課に配属され、先輩から、昨年は、ノモンハン事件による戦死者の保険金請求に追われ、多忙を極めたと聞かされた。延期していた徴兵検査をうけ第三乙となった。ひよろひよろとした体型で、やせていた私は皆から丙種だろうと言われていたが、新設された第三乙になったのである。

契約者から保険金支払に関する照会の文書の回答を担当していた私は、昭和一六年二月アメリカ在住の日本人から「日米戦争が始まったら、保険金は支払って貰えるのか?」という照会の手紙を貰った。この人は日・米二重国籍だと書いてあった。既に為替管理法の規定が厳しく、外国への送金は大蔵省の認可が必要で現実には困難を極めていたので、私は保険金は支払えるが送金が難しいという手紙を起草して、当時のT課長のところを持っていった。まもなく課長に呼び出さ

れ、「日米戦争が始まればアメリカ国籍をもつ人は刑法上敵国人となり、敵国人に保険金は支払えない、手紙をそのように書きなおせ」と言われて、びっくりした。書きなおした起案に、T課長は手を入れてくれて、やんわりとした表現になった。

同輩たちは、日米戦争は起こらないと思っていたようで、大笑いする者もあり、「まさか」という気持ちも強かった。

昭和一六年一二月八日未明のラジオは日米開戦を告げ、「まさか」は現実となった。日常生活は厳しくなり、食糧はなくなりはじめた。昭和一七年四月のド・リットル日本空襲があった。アメリカがド・リットル中佐指揮のもと、空母から飛行機を発進させ、東京空襲後中国に着陸した無謀な空襲だった。しかし、その被害も少なく、連合艦隊はどうしてるのかという人の言葉は冗談と聞きとられた。

昭和一八年四月二八日、私は召集(赤紙)を受け、豊橋の部隊に入隊した。一〇日程して応召兵は暁部隊(船舶高射砲隊・二九五三部隊)に転属となり、広島宇品に移った。私は

梅雨期の猛訓練のため胸をやられ、七月五日広島陸軍第一病院に入院となった。翌年二月に退院して明石の高射砲部隊に転属となったが、そこで再度召集解除となり、三月には東京の自宅に帰った。一か月の休養後五月から第一生命の職場に復帰した。若い男子はほとんど出征し、停年になった人が再就職して働いているという状況で、生命保険業界としては、男子に徴用がこないよう努力するのが、せい一杯であった。しかし戦局がきびしく、女子職員が集団で工場に徴用されいく日を迎えた。

我が家では弟二人が出征、心臓の悪い母が小田急線伊勢原に疎開し、市立第一高女を出た末妹も、伊勢原近くの海軍基地で軍属として働きはじめた。

昭和二〇年二月のP19の艦載機による機銃掃射は、さまざまだった。警防団員として隣の丸の内警察に伝令に行き、帰社して西側の玄関から中に入ろうとして後をふり返った時、私は銃弾がコンクリートの上をすべってゆくのを見た。この時屋上（八階）にある機関砲隊が掃射をうけ、一名戦死、一名重傷の犠牲を出した。後日、白木の箱を抱いて喪服の未亡人が、二人の兵にまもられ西門を出ていった。情報をきいた私たち二階の支払課員は、ベランダに出て、下を通ってゆく葬列をお見送りした。

独身の私は宿直も多くなり、地下四階にあった日本間（柔道場）で仮眠をとったが、「しらみ」に悩まされた。もともと、私は広島第一陸軍病院で南京虫に悩まされ続けていたので、

「しらみ」は「南京虫」よりはいいと思うことにした。

三月一〇日の東京大空襲は、すさまじかった。我が家は電車線路一つを隔てて焼け残り、おかれて会社にかけていたら、眼をやられた被災者の群れが窓口に行列をなしているのに、びっくりさせられた。家財を焼き何もなくなった人が、ふと思いついて生命保険があったと気がつき、証券を再交付してくれと窓口に押しよせたのである。

社屋七階には、関東地方を統轄する陸軍司令部がおかれていたが、八月一五日の終戦後まもなく司令官T大将がピストルで自決した。

九月下旬私は社屋二階の中廊下で、正面玄関からアメリカ軍将校が三人入ってくるのを見かけた。建物がアメリカ軍に接收されるという噂が既にあり、私は、もう立退きだなど感じた。

第一生命の建物が、マッカーサー元帥のG・H・Qとなる一週間前、職員は書類運搬用の手車をおして、日比谷から京橋まで、空き腹をかかえて、何回も往復したのである。敗戦の実感を強く感じた。次弟のサイパンでの戦死の通知を受けたのは、昭和二〇年十一月のことだった。

私が戦争で見たもの

●西荻南三丁目

南澤 美都子

(昭和二年生まれ)

昭和二〇年五月二五日、二度目の東京大空襲の夜の午前一時ごろ、中野区上高田二丁目で、五〇キロ焼夷爆弾が家の真ん中を直撃。被災しました時私は一七歳でした。

戦争が始まって以来、軍人たちは「勝った、勝った」と宣伝し、一般の人々もそれに迎合して思ったままを口に出来ない時代でしたが、この年三月一〇日には東京大空襲で、火は下町から中野近くまで焼いていました。

このころは、高射砲の弾も高度を飛ぶ米爆撃機B29には届かず、敵機は悠々頭上に飛交い、出撃する日本機はときたまという有様でした。華やかな空中戦などは映画の中でのこと。まれに出撃してもB29爆撃機の一〇分の一程度の戦闘機は、敵に体当たりしたかと思う瞬間、すぐパラパラと壊れ落ちていき、敵機はそのまま悠々と飛び去るのを、何とも悲しく、やりきれない思いで見っていました。

敵機に届かぬ高射砲の弾は、細かい破片となつて降ります。二五日の夜、我が家の雨戸に当たる高射砲の破片の、サラサラと鳴る霰のような音が、高く長く続くのを「今日はいつも

より多いな」と思いつつ、親子四人防空壕に身を潜めていました。

その音が一瞬途絶えたのです。ほんの二、三秒程、全くの無音状態にアレッと思わず頭を上げた時、激しい爆発音が起こり、仰向けに飛ばされ叩き付けられました。壕は地中深く作られていても爆風は上部の土を剥ぎ、戸は倒されむき出しになった入口の梁に火が付いて燃え出していました。倒れた私の鼻先五〇センチもない近さです。爆風は火と同じ熱さで全身思い切り殴り倒された感じでした。目の前の火に逃げようと焦っても立ち上れず腕き、やつと身を起こした時、父の姿はありませんでした。壕の後出口も開かず、こちらは爆風が土を被せてビクともしません。火に迫られ両の素手で土を掘り、僅かな穴から三人が這い出した時、あたりは火で昼のよう。父のたくさんさんの蔵書も家財も消え、柱だけが火を吹きながらゆらゆら、今にも倒れそうに揺れていました。五〇キロ焼夷爆弾は、三、四軒目ごとに落とされ、その間々に小さな細長い焼夷弾がバラ撒かれたのです。

多くの人が燃える家々の間の道を必死に走っていました。母はやっと壕から出ると燃える我が家に安心して立っていて、リヤカーを引いた男に突き飛ばされ、再び火の中に転って行きました。トッサに火の中に飛び込み助け、風の方向を判断して安全な所に導いてくれたのも一五歳の弟でした。

新宿・中野・杉並は当時まだまだ空地がありましたから、幼児のいない私の家では地方に疎開する事など考えていませんでした。何かあれば集まる所と定めていた空地に家族が出会った時、まだ所々草は燃え、遠くの空は花火のように焼夷弾が撒かれており、空襲が終わっても火は治まらず、遙かなオリエンタル工場が時々青白い火を吹き上げて孔雀の飾羽のように爆発するのが見えませんでした。大火に伴う強烈な風には大人も立っていられず、みな座り低くかがんで風を避けながら、燃える四圍を見ていました。

父は何とか少しでも火を消そうとしたそうです。いくら叩いてもその火は消えず、何やらねばっこい火であったとか。諦めて逃げ出した時泣き声を聞き、娘と思って火中から救出してみたら隣の家の娘だったとのこと。

親子四人翌朝戻ると、先に戻っていた隣人たちは押し黙って見つめるばかり。しばらくして「生きてたの」と駆け寄りました。家が吹っ飛んだのを目撃した人たちは私たちを見て幽霊だと思ったそうです。靴は底が焼けて翌日は使い物になりませんでした。我が家を砕いた爆弾の葉莢は潰れて横たわっていましたが、大きなドラム缶程で、女の私ではいくら

引っぱっても動きませんでした。

何もかも生木まで燃えてしまった焼跡は、瓦とトタン板だけが地を覆っていて、煮炊きする物がありません。焼け残った幼稚園が臨時救護所になり、やっと横になれる所を得て疲れ果てている被災者たちは、布団も無い板敷きにも倒れるように横たわると、死んだように寝ました。逃げのびるだけがやっとの、着のみ着のままの私たちが、ようやく僅かな握り飯の配給を受けたのは翌日の夕方でした。

新宿方面は伊勢丹・三越・二幸のビルだけ残り、西北は野方刑務所の高い塀が臨まれ、広い焼跡に立つと地平線から昇り地平線に沈む太陽を、東京にいて初めてしみじみ見ました。

焼死した人々の中には遠くから避難して来て被弾した人もあり、検死が捗らないとかで死者の身体は何日もそのままでした。近くの店の小学六年生の男の児が、病気の母を助けようと燃える家に入り母子とも死んだのですが、近所の人が出てあげられたのは、上にトタン板を覆せてあげる事だけでした。

被災者は色がどす黒くなっていてすぐ分かれると言われました。顔を洗っても洗ってもしばらく消えなかったのは、熱い爆風を浴びたせいでしょうか。

学生はみな軍需工場に動員されましたが、小学校を出たばかりの少女たちも北海道など地方から多く連れて来られて働いていました。至近弾に揺れる壕の中で「どうせ助からないならお母さんのそばで死にたい」と泣くのを言葉もなく、何

人も抱いていたものです。

被災した半月後、私たちは杉並区天沼三丁目に移りました。街は大方焼亡して大空襲はもうなくなっていました。戦闘機が機銃掃射を度々してゆき、母も壕に何度も避難するのに疲れ、ある日二階で寝ていたら、その姿が見えたのか急降下してきてバリバリ撃ったので夢中で逃げたと言っていました。

天沼もまだ畑があり広い庭のある家が多かった所で、食糧事情が極端に悪化したころはどこも庭を潰し畑に代え、空地は耕されて芋類など植えたものです。私の作った薩摩芋やトマトも夜に全部盗まれましたが、畑の主たちは小さな見張所を建てて不寝番をしていました。夜毎「泥棒、泥棒」と叫ぶ声と人の追い、走る足音が慌しくあちこちに聞こえ、追われた盗人が塀を乗り越えて飛込んで来たこともありました。近所の主婦が南瓜一つ盗んで見付かり、畑の主にも撲殺された事も忘れられない事件です。

ここに記したのは戦中私が見たほんの一部ですが、もっと辛い、ひどい経験をされた人も多いと思います。戦争を美化し今でも正当化する軍人がいますが、いつの時代でも苦しむのは庶民です。せっぱ詰れば道徳や常識が失われて平常では考えられないことをするのも人間です。戦争の実体、本当の姿を知って欲しいと思います。一人一人が冷静に判断し、権力欲や自らの欲望に惑わされぬようになれば、愚かな戦争もなくなるのではないのでしょうか。平安な世界がくるよう祈つ

てやみません。



杉教收第三二九號 昭和二十年三月八日

東京都杉並區長 山根 幸 八

殿

國民學校授業線上終了ニ關スル件

標記ニ關シテハ曩ニ二月二十七日附杉教收第二六五號ヲ以テ豫メ通牒致置處時局ノ緊迫ニ鑑ミ之レガ實施ニ關シテハ左記事項ヲ留意シ措置セラル、様東京都教育局長ヨリ通知有之候條可然御配意相成度

記

一、國民學校本年度第三學期授業線上終了ハ三月十日以降可及的速ニ實施スルコト

二、線上終了ニ依ル授業休止期間中ニ於ケル學校教職員ハ學校防空其ノ他ノ執務ノ爲メ平常ニ準ジ勤務スルハ勿論正規ノ學年末授業休止期間中ト雖モ任地ヲ離ル、ガ如キコトナキコト

三、高等科兒童ノ勤勞動員ニ關シテハ、期間中ト雖モ平常ニ準ジ豫定計畫實施ノコト尙勤勞動員ノ割當ナキ高等科兒童竝ニ初等科高學年兒童ニ於テハ地域のニ狀況ヲ勘案シ食料ノ増産又ハ時局下適切ナル勤勞奉仕等ニ關シ關係方面ト密接ナル連絡ノ下ニ周到ナル計畫ヲ樹テ之ガ實施ノ指導ニ積極的ニ努力スルコト

四、修了式、修業式ハ豫定期日ヲ以テ施行ノコト、但シ右期日前ニ疎開スル兒童ニ對シテハ後日修了證書又ハ修業證書ヲ當該學校ヨリ直接保護者ニ送付スルカ又ハ疎開先國民學校ヲ通ジ傳達スル等適宜措置ヲ講ズルコト

〔杉並區教育史 下卷〕より抜粋